

度に辟易し、寧ろ新疆を放棄して、後難を除くを得策たるに若かざるの意見を有せしも左宗棠の爛眼なる、夙に露國の野心測り知るべからざるを看破し、斷然李鴻章等の意見に反對し、『新疆一たび露國の手に歸せんか、甘肅、陝西、山西等の邊防益、緊要を告げ、直隸亦枕を高くするを得べからず。一を守るの勇なきもの、焉ぞ兩三を守るを得んや』と極論して、廟議遂に條約を破棄し、開戰に決せしめたり。露國をして里瓦齊亞條約を修正し、竟に伊犁一帶の占領地を清國に還附せしめたるは、當時土耳其との紛擾ありて、多少露國の鋒鏑を鈍らしめたるに由ると雖も抑も亦左宗棠の讜言大に力ありしに非ざらんや。

然れども露國の執拗なる、一頓挫の爲めに宿志を放棄するものに非らず、銳意伊犁に對する施設經營の歩武を進め、露國の勢力が伊犁一帶の地に瀰漫しつゝ、在るは、一たび伊犁の地を踏む者の一驚を喫する所なり。偶、日露戰役に於て、敗衄の辱を蒙りし結果、多大の障礙を受けて、陽に其の鋒鏑を收め、一時慎重の態度を装ふと雖も陰に其の爪牙を磨き、孜孜として勢力扶植の道を講じ、今や漸次再び其の萌芽を發せんとするもの少からざるを覺ゆ。